

北 村 四 郎*: 中華産蘭草屬の分類及び地理的研究

Siro KITAMURA*: Taxonomic notes on Chinese *Eupatorium*.

蘭草属は和名ではフデバカマ属である。本属は主としてアメリカに分布し 450 種程知られてゐる。欧亜大陸へはアラスカよりシベリアへ北の路を通つて、現今より暖かい時代に移動したもので東亞には 18 種程ありこの中の *E. cannabinum* のみが歐洲迄分布してゐる。これ等欧亜のものは日本及び台湾に 12 種あつていづれも *Eximbricatae* 節に属し、この群の祖先型は形態的に中間型であつて且つ最も廣く東亞に分布する *E. Lindleyanum* サハビヨドリである。これは北米の *E. hyssopifolium* と類縁がある。東亞のフデバカマ属の分類は非常に困難なものゝ一つである。これは現世に於て分化し種が形成されつゝあるからと考へられる。

中華國には 6 種を産するが簡單に區別点を示すと

1. 葉は下面に油点なし 2
 葉は下面に油点がある 3
2. 葉は屢々大きく長さ 8-15 cm. 通常 3 深裂し裂片は先端尖るか又は鋭尖頭となる フデバカマ
 葉は小さく長さ 5.5-9 cm. 常に分裂しない *E. caespitosum*
3. 総苞片の先端は多少鋭く、葉は細く縁狀披針形又は披針形で通常 3 脈が著しい サハビヨドリ
 総苞片は先端鈍形又は円形である 4
4. 総苞は長く 7-7.5 mm. 葉は 3 深裂し、無柄、裂片は先端尖る *E. heterophyllum*
 総苞は長さ 5-6.5 mm. 5
5. 葉は 3 深裂し、裂片は先端尖る。短柄がある。 タイワンヒヨドリ
 葉は分裂せず 6
6. 葉は卵形無柄 *E. chinense*
 葉は長楕円狀披針形又は長楕円狀卵形有柄 ヒヨドリバナ
1. *Folia subtus eglandulosa* 2.
 Folia subtus glandulosa 3.
2. *Folia majora* 8-15 cm. longa, saepe trisecta, laciniis acutis vel acuminatis. *E. Fortunei*.
 Folia minora 5.5-9 cm. longa semper indivisa *E. caespitosum*.
3. *Involucris squamae apice plus minus acutae, folia lineari-lanceolata vel lanceolata saepe trinerviata* *E. Lindleyanum*.
 Involucris squamae apice obtusae vel rotundatae 4.
4. *Involucrum* 7-7.5 mm. longum, folia trisecta, subsessilia, laciniis apice acutis *E. heterophyllum*.
 Involucrum 5-6.5 mm. longum 5.

* 京都大學理學部植物學教室 Botanical Institute, Faculty of Science, University of Kyoto, Kyoto.

5. Folia tripartita, breviter petiolata, laciniis acuminatis.....*E. formosanum*.
Folia simplicia6.
6. Folia ovata subsessilia.....*E. chinense*.
Folia oblongo lanceolata vel anguste ovata petiolata*E. chinense* var. *simplicifolium*.

1 *Eupatorium Fortunei* Turcz. in Bull. Soc. Imp. Nat. Mosc. 24. (1851): 150. Handel, Mazzetti in Not. Bot. Gard. Berlin-Dahlem 13 (1937): 608.-*E. stoe-cadosmum* Hance

本邦に於てはフデバカマは稀に野生し点在する、これをサハヒヨドリやヒヨドリバナが到る処にあるのと比べると分布上異なつてゐる。現今では殆んど栽培されてはいない。それで私は奈良朝以前に香草として、中華より渡來した蘭草が野生化したものではないかと疑ふ。日本書紀天智天皇の忍坂大申姫のところに、蘭を栽培した記事が見える。奈良朝平安朝にはフデバカマを栽培した。香草としても觀賞用としても利用された。中華に於ては現今も尙栽培し利用してゐる。華北には一般には野生してゐない。華中、華南には野生してゐる。本邦のフデバカマも野生化したものとする中華、華南のものもどれか眞の野生か不明である。我が國でも河の堤に生え湿地には生えてゐないが、中華でも河の堤に野生してゐる。学名の *E. Fortunei* の原標品は R. Fortune 氏も華北で採つたものでこれは栽培品であらう。Hance 氏が J. C. Nevin 氏が廣東省の北江、及び連州江の河口で 1836 年 10 月に沢山野生してゐるのを発見した。これが最初の野生の発見だ」と書いてゐる。これも眞の野生かどうか明かでない。Hemsley 氏は台湾の淡水、湖北省の巴東、廣東省の黃埔を挙げてゐる。淡水のは栽培で自生でないことは私は其の地に採集して知つた。林鎔氏は陝西省の藍田縣で採集したことを報じてゐる。私は中華産の本属の標品を多く檢定したが、最も多いのは日本と同じくサハヒヨドリとヒヨドリバナであつて、フデバカマの野生品は見えてゐない。本邦でも古く本草綱目啓蒙や古今要覧稿には野生多しとあるが、現今野生は稀れである。然し中華以外のものではないから、眞の野生地は華中であらう。佛印の東京で家の附近に栽培し、通俗名は *Cayman tuoi* で薬劑とする。(Gagnepain, Fl. Gen. Indo-chine 3 (1924): 507)。暹羅の磐谷では薬用として栽培する (Kerr, Fl. Siam. 2 (1936): 250)。土名は *San pra ha-un* である。華北では栽培し、薬用とする。鮮鴈蘭葉は 100 斤が 30 元であつた(趙橘黃氏初州薬誌 (1936) 39, 図版 56, 59, 60)。

古典に依れば漢以前にこれが香草として栽培され、乾燥し時に芳香が出るので愛好された。陸機は (26-274) 詩經の蘭は蘭であるとしてゐる。この蘭はフデバカマであると思はれる。詩經の蘭は澤蘭サハヒヨドリであると思はれるが、これを註した陸機は澤蘭とは異なる蘭を述べてゐる。従つてフデバカマの中華に於ける認識と其の栽培は、詩經の時代と陸機の時代の間と云へる。神農草でも蘭草と澤蘭は別にしてゐる。陶弘景 (452-536) は澤蘭に就いては明かにサハヒヨドリをあてゐる。蘭草は澤蘭に似たものであるとし、其の前からの利用の途を神農本草に伝へてゐるが、當時は一般には利用されな

いことを記し、弘景も認識不足である。唐本草 (659) では蘇敏は蘭草は世間で多くこれを植え觀賞することを明記してゐる。これではフデバカマを再認識し、又澤蘭はサハヒヨドリである。陳藏器の本草拾遺 (739) の蘭草はフデバカマ、澤蘭はサハヒヨドリである。本草衍義 (1116) では冠宗爽は蘭草とラン科の *Cymbidium* 属のものとを混同した。後世蘭はラン科のものを指す様になつた。本草綱目 (1578) に時珍は蘭草はフデバカマに澤蘭はサハヒヨドリにあてた。本草和名 (918) の蘭草は唐本草の蘭草であつて、和名フデバカマはこれと同定したものである。恐らく物を知つて同定したものであらう。従つて今のフデバカマ即ち *Eupatorium Fortunei* と平安朝のフデバカマは同一物である。

2. *Eupatorium Lindleyanum* DC., Prodr. 5 (1836): 180. *E. nodiflorum* DC., Prodr. 5 (1836): 179. Clarke, Comp. Ind. (1876) 33. Gagnep., in Lecomte, Fl. Gen. Indo-chine 3 (1924): 508. Koster in Blumea 1 (1935): 495. — *E. Kirilowii* Turcz. in Bull. Soc. Nat. Mosc. 7 (1837): 153.

Distr. Manchuria, Korea, Japonia, China tota, Philippines, Malaya, Indo-china, Siam, India (Bengal, Assam, Khasia, Himalaya).

サハヒヨドリは甚だ廣く分布することが明かとなつた。従來印度、佛印、馬來に分布する *E. nodiflorum* はサハヒヨドリであると私は同定する。*E. Kirilowii* と *E. Lindleyanum* サハヒヨドリと區別する人がある。近年では中華の林鎔氏、オーストリアの故 Handel-Mazzetti である。區別点としてはサハヒヨドリは南方に分布し、葉に 3 脈が著しく、葉は分裂しないのが通常であり、*E. Kirilowii* は北方に分布し葉に 3 脈は著しくなく羽狀脈であり葉は 3 裂し 6 裂片が輪生することをとりあげてゐる様である。然し葉が 3 脈となるか羽狀脈となるかに就いては明かな特徴でない。日本及び華南のものでも 3 脈が著しくないものがある。一部が 3 脈而他が羽狀脈のものもある。葉が 3 裂するかせぬかは既に一般に認められてゐる如く、野外で多くの筒体を觀察すれば何処でも分裂型と不分裂型とがある。毛の多少についても、何処でも変異があつて區別にはならない。私は両者は同種としたい。サハヒヨドリは *E. cannabifolium* に似てゐるがこれとは總苞外片が鋭つてゐることで區別し得る。湿地に野生すること、其の他の形態は両者はよく似てゐる。*E. cannabifolium* は歐洲に廣く分布し、シベリアはウラル迄、南の方ではカウカシア、ペルシア、小亞細亞、シリアに及んでゐる。林鎔氏は浙江省の天目山より報告してゐるが、Handel-Mazzetti 氏も云つてゐる様に何かの誤りであらう。この兩種の種差は著しくないので、これを合一し *E. cannabifolium* の下に変種とすれば類縁を明示し得て好ましいとも考へられる。

サハヒヨドリは湿地に可成り普通な植物で筒体数も多い。時に水が表土に迄ついてゐる場処にも自生する。中華では殆んど全土に分布し筒体数も多いもの一つである。陸機が詩疏に詩經の鄭風溱洧篇の蘭を蘭としてゐるが、溱洧水辺の蘭はこれを蘭草

属のものとするれば、植物分布上からはサハヒヨドリに適用すべきであらう。神農本草の澤蘭は明かにサハヒヨドリである。蘇敏、陳藏器、時珍いづれも澤蘭にサハヒヨドリをあてゝゐる。中華では沢蘭を栽培し薬用香料にしたこともある。

3. *Eupatorium chinense* L., Sp. Pl. (1753) 837—Merrill in *Sinensia* 1 (1931): 3—*E. Reevesii* Wall ex DC., Prodr. 5 (1836): 179.

Distr. China. Chekiang, Hunan, Kiangsu, Kiangsi, Kwantung. Indo-china.

E. chinense は Linne 氏は葉が卵形、先端鋭尖、有柄、無毛、鋸齒あることを記相してゐる。この原標品は Osbeck 氏が廣東省の黃埔又は廣東で採集したものである。*E. Reevesii* は Reeves 氏が廣東附近で採集したものであつて、Aug. de Candolle 氏は葉はやゝ無柄、卵形、鋭頭無毛、葉脈は有毛であることを記してゐる。E. D. Merrill 氏は *E. chinense* に *E. Reevesii* を同定した。これは恐らく正しいことと思ふが葉が有柄先端鋭尖なる点で記載面では一致しないのでこの点を明かにしたい。華中より華南、佛印にかけて葉が卵形やゝ無柄、葉裏に油点の多いものがある。これは本邦のヒヨドリバナに頗る近い型である。ヒヨドリバナは葉が長橢円狀披針形で、卵形でなく基部やゝ楔形で、葉柄がある点で区別する。従つてヒヨドリバナは *E. chinense* の変種として取り扱ひ度い。

尙 Hooker は Fl. Brit. Ind. 3 (1881): 243 で *E. Reevesii* を記載してゐるがこれは Hemsley 氏が云つてゐる如く *E. Wallichii* 型が混つてゐる様である。*E. Shima-dae* は台湾に産するが、これは葉が卵狀披針形で先端鋭尖形であるので区別する。私が見たのは浙江省桐廬—建德間、杭州王泉、天台山、湖南、岳麓山、孤山、江西、都昌縣下方村、湖口縣花尖山、江蘇、常州、無錫、江西、九江、廣東、樂昌縣 狀元山、印度支那：Doi Stepi 等である。

ヒヨドリバナ *E. chinense* var. *simplicifolium* (Makino) Kitamura (Syn. *E. japonicum* Thunb. *E. japonicum* var. *simplicifolium* Makino in Tokyo Bot. Mag. 23 (1909): 142). は日本には至るところの丘陵や山林の光のあたるところに多いものである。やゝ乾地に生える。中華で私が檢した標品は、湖南、長湖廟到長樂鎮沿道、江蘇、竹林寺、連雲、浙江、西天目山、普陀島、江亞、廬山、廣東、大埔縣銅鼓山、梅縣陰那山、安徽、歙である。Hemsley 氏は尙福建、湖北に産することを報じ、林錦氏は陝西省、山東省にも産することを挙げてゐるが、河北、山西には分布しないことを記してゐる。

E. Wallichii DC. とは原記載に依れば葉は少し葉柄があり、卵狀披針形で總苞片少なく鋭形となつてゐる。これはバアリック氏が印度の Nepalia で採集したもので、これを最初に支那植物に適用したのは G. Bentham 氏である。Fl. Hongk. (1861) 172 に *E. Reevesii* とは葉の基部が楔形で總苞片は少なく、花は 4 花あるとしてゐる。Hemsley 氏や Handel-Mazzetti 氏はこれをヒヨドリバナ (*E. japonicum* Thunb.) に合一した。山本由松氏がこれをフデバカマの変種としたのは誤りである。私としては印度

に於ける変異を見ない限り同定し得ない。

ヒヨドリバナに関しては名医別録の註に陶弘景は澤蘭のところで山中に甚だ似た一種があるといふのがこれで、図経本草に山蘭とあるのもこれであらう。和名は古今要覧稿に依ればヒヨドリの来る頃に咲くからと釈名がある。

4. *Eupatorium heterophyllum* DC., Prodr. 5 (1836) : 180.—Handel-Mazzetti in Acta Horti Goth. 12 (1938) : 203—*E. Wallichii* var. *heterophyllum* Diels.—*E. Mairei* Léveil.

この植物は原産地不明のものである。Clarke 氏が *Compositae Indicae* (1876) 34 にこれを印度の *E. cannabinifolium* の typical なものにあて、Hooker 氏もこれと同見解である。Diels 氏は *E. Wallichii* var. *heterophyllum* として中華植物に適用した。Handel-Mazzetti 氏は独立の別種として認めた。分布は印度の高山、雲南、四川、西康である。私の検したものは西康、Kangting のもので総苞は長さ 7—7.5 mm. ある。一見 *E. cannabinifolium* とよく似たものである。私は *E. cannabinifolium* の標品は 5 筒体しか見てゐないが総苞は長さ 5—5.5 mm. である。従つて歐洲のものゝ多くの筒体を見て其の変異を知らなければ確たることは云へぬが、今のところ別種として區別しておく。又この標品が *E. heterophyllum* DC. の type のものに一致するかも明でない。尙この標品は Harry Smith 氏が採集し、Handel-Mazzetti 氏の検したものである。

5. *Eupatorium caespitosum* Migo in Journal Shanghai Science Institute 3 (1934) : 7. Distr. Kiangsu.

これは御江久夫氏が上海、江湾で採集された標品を沢山拜見した。葉裏に油点のないことはフデバカマに類似してゐる。この群にはフデバカマ、ヤマヒヨドリバナ（九州）、タシロヒヨドリ（台湾）などがあり、各々別種とすべきものである。

6. *Eupatorium melanadenium* Hance in Journ. Bot. 1885 : 325
Distr. Kwantung.

これは C. Ford 氏が 1883 年 9 月 廣東省の羅浮山への途で採集したものである。私は標品を見ないので不明である。記載を読めばサハヒヨドリと *E. chinense* との雑種かもしれない。Hance 氏も Hemsley 氏もサハヒヨドリに近縁のものとしてゐる。

7. *Eupatorium formosanum* Hayata, Fl. Mont. Formos. (1908) 122—Kitam., Comp. Jap. 1 (1937) : 295. Distr. Formosa, China, Anwei.

タイワンヒヨドリが安徽省懷寧縣甘露寺及び同縣陳家牌で採集された。これはいづれも前川文夫博士の採集である。こゝに新しく華中に産することを報告する。